

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

センター通信

第 8 号
2014. 3. 25

物語の中の「旅行」の読み方

江戸川乱歩『押絵と旅する男』の中心に

村上 和夫

●観光学とは

観光学とは、人々が旅行する事を対象に研究する分野である。それも楽しみを求めている旅行について研究を主とする。旅行は、有史以来の人の営みだがこれが近代に入って注目されるようになったのは何故であろうか。さらにそれが学問研究の対象になるのは、なぜであろうか。それは産業化の功罪と深く関係している。農村から都市に集まった労働者は飲酒や賭博に溺れることが多く、彼らの生活改善を目指して起こった禁酒運動のひとつとして「親睦のための団体旅行」が企画され安価で販売された。やがてこの運動と商品開発の流れは、欧州に広がり、労働者が積み立てを奨励し休暇旅行を促進するための援助をする国も登場する。さらに、富裕層のリゾートに対す

る労働者のリゾートも開発されて行くのである。

観光の根底には「何のために働くのか」と言う問いがある。その答えが「一人々々の豊かな生活のため」であることは言うまでもない。観光は、最初はキリスト教の社会活動のひとつであったが、強い社会倫理とともに推し進められて世界に広まり、近代を代表する大衆社会現象となったのである。それ故、英語では旅行(tour)に主義(ism)をつけて tourism と標記されるのである。

●大衆文化のひとつ、観光現象

現在の観光は、時として社会風紀を乱す事もあるが、新しいファッションや慈善活動の場となることの方がより多く、豊かさのパロメーターとなつて

〈研究ノート〉

物語の中の「旅行」の読み方

江戸川乱歩『押絵と旅する男』の中心に

〈エッセイ〉

乱歩邸と不思議な縁の話

〈紹介〉

小樽文学館「没後二〇年 中井英夫展」を開催して

〈資料紹介〉

「江戸川乱歩ミステリブック」と探偵小説雑誌「黄金虫」

〈編集後記〉

— 目 次 —

村上 和夫

大塩 竜也

本多 正一

落合 教幸

いる。私たちは、銀座に世界のラグジュアリーブランドが次々に店舗を構え、景観がかわってしまったこと、あるいは東日本大震災の後しばらく続いたボランティアアツリズムの大きな動きに思いを馳せる時、大衆に支えられた観光の持つ力を知ることになるのである。

観光が大衆社会現象であることから、小説やエッセイの素材として頻繁に使われてきた。観光地が小説の舞台となるには、地名・位置・気候・歴史などとその楽しみ方を読者(大衆)が想像できる前提があるからである。例えば、角田光代氏の短編に『誕生日休暇』と言う作品がある。主人公の女性、転職した会社にある誕生日休暇制度を利用して、同僚の勧めをうけて気乗りのしないハワイに出かける。し

かし、そこで出会った男性から結婚に至る複雑な話を聴き、彼のような偶然のながれに身を任せる人生もあると気づく物語である。この小説では、ハワイと言う典型的な観光地(日本人にはいくぶんつまらない観光地)への旅行(個性の無い観光)に対する読者の共通連想が前提とされている。その結果、離れた土地(観光地)で主人公が男性と偶然に出会う筋書きは自然なものとなる。

●小説の舞台としての観光

観光が文学の背景として意味を為す基底的な大衆文化となったのは、トマス・クックなどの旅行社などによる旅行の標準化と関係しており、近代化の過程で人々が観光旅行や観光地で共通の旅行経験を積み重ねた事に由来す

る。これは、人々に観光地の位置や景観や気候などの事実に対する認識を作り上げると同時に、旅行者の経験や観光産業の商品、あるいはそこで働く人々への共通のイメージを広げ、価値を創り出した。それらが、観光と言言葉（経験）へのコピーションを創造してきたのである。

「京都」と言えば、修学旅行、それは学生時代の悪戯の思い出や甘い思い出につながるものであり、温泉地「熱海」となると、大人の遊び場^①となつて行くのだ。観光産業にとり、広告宣伝費を節約する働きを持つが、反対に人々の関心が薄れると今度は重い枷となり纏わり付く厄介なものとなつてしまふ。文学の世界、あるいはポピュラーミュージックの世界などでは、これらが大衆文化を表現するための創作の素材として利用されるのである。

観光地の位置や気候などに特段の関心を払うは、大衆小説のひとつである推理小説である。しかし、純文学を代表しノーベル賞作家である川端康成氏も、多くの作品で舞台を観光地にとり、そこで生活する人々と旅行者の交流、喜びと葛藤を描いている。観光地のイメージが巧みに利用されているのである。川端氏が描く、列車、景観、町の

風情は実に精緻で旅情に富んでいる。観光が大衆社会現象のひとつであり、大衆小説ばかりか文学の世界全般においてもそのイメージが素材となりうることを理解できる素晴らしい例である。

●『押絵と旅する男』の理解の試み

本誌は、江戸川乱歩大衆文化研究センターが発行する雑誌である。乱歩氏の作品にも観光が舞台となる作品『押絵と旅する男』^②がある。富山県の魚津へ蟹気楼を觀に行つた帰り、主人公の「私」は上野に向かう汽車の二等車に乗ると、そこにはもう一人、風呂敷包みを持った「男」が居た。興味を持ち觀察していると、「男」はやがて風呂敷の中身を見せるが、それは洋装の老人と振袖を着た美少女の押絵だった。老人は自分の兄であると言ひ彼らの「身の上話」を語る。「男」は、ひとしきり語り終わると風呂敷で押絵を包み、途中駅で下車してしまふ話だ。謎めいた話は、乱歩氏の作品らしい。この小説が掲載されたのは1929年（昭和4年）であり、舞台となつてゐるのは関東大震災（1923年）前の明治末期から小説が書かれた昭和のこく始めと言う設定である。

●なぜ北陸本線の列車の中なのか：

主人公が「男」と出会う、富山県の魚津に蟹気楼を觀に行つた帰りと言う設定は、本文中に「私は何時の何日に魚津へ行つたのだと、ハッキリ証拠を示すことが出来ぬ。」と曖昧さをもつて書かれており、文学的にはこの「男」との出会いを幻想的にする仕掛けとする理解が妥当なのかもしれない。しかし、このような大衆小説を読む場合、曖昧さ^③が幻想的世界を導くとして、物語論としては、どのような現実理解（大衆性の理解）の上にそれが成立しているかを確かめる必要がある。そうしなければ、「ハッキリ証拠を示すことが出来ぬ。」と言うくだりが、直前の「私がこの話をすると、時々、お前は魚津なんかへ行つたことはないじゃないかと、友達に突込まれることがある。」と言う問いに対する答えと言う談話論的で単純な解釈になつてしまふ。それでは、大衆文学を論ずるに読者を無視した理解のようになってしまふからである。

もし、このくだりが談話論的掛け合いならば、わざわざ魚津に行つた帰りに北陸本線の列車に乗り信越本線に向かい北進する必要は無い。さらに二等車に乗車する必要も無い。物語をきち

んと読もうとするならば、そこには友人^④読者をわざわざ登場させて、それが読み方を誘導する仕掛けではないかと言う疑問が湧いてくる。昭和の初期、すでにこの小説を読む読者には「魚津の蟹気楼の持つ幻想性を楽しむ」と言う観光への共通理解があつたことを仮定してみると、その効果が何なのか解ってくるのである。

日本ではすでに江戸時代に旅行指南書のような道中記が多く出版されており旅を楽しむ技法は社会に共有されていたが、近代的な観光ガイドは、1913年（大正2年）にジャパン・ツーリスト・ビュローが「ツーリスト」を、ついで1922年（大正11年）に当時の鉄道省内に設けられた「日本旅行文化協会」と「日本旅行協会」により雑誌「旅」が刊行されるまで待たなければならぬ。この「日本文化協会」の中心人物は、三好善一、大町桂月、田山花袋らであり、日本における近代的な旅・楽しみ方の出発点で詩人や小説家たちの果たした役割の大きさが窺えるのである。そうだとすると、『押絵と旅する男』の読者が、他の文学作品や絵や写真などから培われた近代的な旅の楽しみ方から「魚津の蟹気楼を楽しむ旅」へのイメージを想起出来てもお

かしくない。

また、北陸本線は米原側から敷設され魚津に至るのは1908年（明治41年）、直江津まで全通するのは1913（大正2年）のことであるが、1928年（昭和3年）に、その後の鉄道敷設に大きな影響を及ぼす事故、柳ヶ瀬トンネル内での機関車運転手窒息事故が発生する。小説が出版されたこの時期、人々の関心は否が応でも北陸本線に向けられていたのである。

さらに、当時の列車等級は三階級で、一等車は限られた列車にしか連結されておらず、「男」と出会った車両は北陸本線では優等車両で、二等車の運賃は三等車の二倍、成功者あるいは階級の上の人のための車両であった。押し絵の兄と旅行する「男」の不思議さと「私」の不安は、二等車の特性から強調されることになるのである。

その上で、柳ヶ瀬トンネルとは逆の方向に進む車両を舞台として、「閉じ込められた世界の人（押絵の中の兄）の命に纏わる話」を語ることは、逆方向にも不思議な出来事の暗示を与え、読者に不安をもたらすことになる。このような鉄道敷設の経緯や当時の出来事、そして近代観光のイメージが小説で当たり前に用いられていた当時の時

代性から読み解くと、「蜃気楼を観に行く」と言う設定が極めて大衆的であり、読者との相互性の上に成り立っていることが解ってくるのである。

乱歩氏は、この小説を執筆した当時、大衆文化の中心が浅草から銀座に移って行くことにさびしさをもっていたとも言われている。建物のファサードまでも統一的にデザインされた欧州風の町並が「モダン」の象徴となっていく。それによって「過去」となる「浅草」に対する人々の反応は、無差別に「浅草」の良さまで失わせると考えたのかもしれない。人々の「楽しさ」に対する志向に敏感に反応しつつ、娯楽の核心を突こうとする乱歩氏の姿勢は、時代を超えて今日の観光研究にも示唆に富んだものである。観光は「楽しみのための旅行」と定義されるが、*「楽しみ」*を忘れてそれは成立しないからである。■

1 角田光代（2002）『誕生日休暇』、『だれかのいとしいひと』白泉社

2 『新青年』1929年6月号に掲載された短編作品。本稿では、岩波文庫『江戸川乱歩短編集』第4刷（2010年）を用いた。

村上 和夫（立教大学観光学部教授）